

埼玉育ちのグローバル人

文教大学文学部 准教授

福田倫子さん



「グローバル人ってどんな人?!」

第2回 日本での留学生との関わりー友人として教師として



前は、マレーシアで日本語教師として勤め、帰国に至るまでを読んでいただきました。そこでは、日本語教師として教え方を模索すると同時に、自分がそれまで常に多数派に属していたことに気づかされました。少数派となった自分が、慣れ親しんだものとは異なる文化、習慣、常識とどう付き合っていくかを考える必要に迫られた結果、どこにいても自分は自分なんだということに遅まきながら気づき、そこにあるものを受け入れる気持ちが湧いてきました。

るのです。



日本での留学生との関わり ー友人として教師として

写真1 友人たちと作った各国の料理

留学生の友人に囲まれた大学院生生活

1年間の契約を終え、日本に帰国して大学院に戻った私は、留学生に囲まれた生活を送っていました。日本語や日本語教育、日本文学等を学ぶ専攻だったため、日本に関心を持つ留学生、日本語教師を目指す留学生が数多く所属し、熱心に研究をしていました。気づけば十数人のグループで私だけが日本人という場面も多く、日本に居ながらにして留学生気分が味わえるような環境でした。様々な国の料理を持ち寄ってパーティーをすることもあり、楽しい時間でした。

マレーシアでの経験で、異文化に対する心の壁が少し低くなったなあと自負していましたが、そこでまたまた新たな経験をたくさんすることにな

韓国人の友人（女性）と一緒に歩くときに腕を組んできます。私の中には大人になってから友人と腕を組むという行動パターンがなかったので、心の中で「おおお〜」と驚き、気恥ずかしいので腕を棒のようにまっすぐ伸ばしたままでいても、彼女の方は楽しそうに腕を組んで歩きます。大人になっても友達同士で腕を組んだりするの？と聞くと、韓国では仲が良い友人なら問題ないとの答えでした。また、普段のんびり話す中国人の友人が家族と電話で話す時に激しい口調になっているのを見て、親子喧嘩でもしているのかと心配になったこともありましたが、中国語では普段からそのような話し方なのだと聞いてホッとしました。台湾からの留学生の中に常に外食をしている友人がおり、経済的に大丈夫なのかなと余計な心配をしていたところ、国では外食の方が安くて便

利だから外食に慣れているとのことでした。後に台湾にあるその友人の実家へ遊びに行った時に納得しました。本当に外食の方が安く、便利で且つおいしいのです。そして街にずらりと立ち並ぶ屋台や飲食店では、多くの家族連れが夕食をとる光景が見られました。台湾からの別の友人達は、台湾の総統を決定する選挙の時に、各候補者の主張や自分の考えを熱く語り、積極的に政治に参加しているんだなと感じました。もちろん個人の性格や制度の違いによるところもあると思いますが、日本人の友人との付き合いの中では見当たらなかった興味深い点です。

このような友人達と過ごす日々の中では、日本代表として語らねばならないことも多くありました。マレーシアでの経験のように海外で生活する学習者に対して情報提供をするのとは異なり、ある程度の期間日本で生活し、日本や日本語について研究している留学生に説明するには日本に関する自分の知識が全く足りないことが改めてよく分かりました。質問に対して適当な知識や思い込みで答え、後で調べたら間違っていた、ということもよくありました。アジア圏の留学生が多かったこともあり、最も気を使ったのは歴史認識の話題でした。日本人が「終戦」と呼ぶ出来事は他の国においてどのような意味を持つのか、外国で今でも日本語を話せる老人の存在が示唆することは何なのか、当時を直接知らない私に一体何が言えて何ができるのか。避けることのできない話題であり、とても苦しい話題でもありました。ですが、最も怖いのは「知らない」ことであり、自国についてだけでなく相手の国についても「知る」ことが、友人をより深く理解する第一歩だということを感じました。

彼らと話す時には、学生の日本語レベルに合わせて単語や文法の難易度をコントロールするのですが、その時に気を付けていることがあります。

それは、単語や文法は簡単なものを選んででも内容のレベルは落とさないということです。ある留学生から、日本語だと頭で考えていることよりも簡単なことしか話せなくて自分が幼くなった気がする、と聞いたことがあります。日本語が発達途上にある存在ということと子どもが思い浮かびますが、自国で高校や大学を卒業したり、社会人経験を積んだりしている留学生に対して、子どもに話すような態度や内容では失礼だということを心に留めています。

相手の国を知ることに関して言えば、留学生は国での学生と教師との関係をそのまま持ち込むことがあるので、その特徴を知っているといちいちビックリドッキリしなくて済みます。学生と教師との距離が近い地域から来た留学生は、帰り道に出会ったりすると「先生、バイバーイ」と明るく手を振ってきます。可愛らしくてこちらも思わず笑顔になりつつも、大学の学生と先生の関係で「バイバイ」でいいのか？と一瞬返事に戸惑います。しかし、それも国での習慣を持ち込んでいるものだを知っていれば、落ち着いて「さようなら」と返事をすることができます（機会があれば、先生には「さようなら」「失礼します」のほうがいいよ、ということを伝えます）。一方で教師と学生の間に強い上下関係があり、教師の指示が力を持つ地域からの学生は、分からないことがあっても質問しなかったり、指示されたことだけをしていて積極的に学んでいるように見えないことがあります。しかし、それもこれまでの学習経験によるものであり、決して怠けている訳ではないと判断できれば、自律的・自立的な研究活動や学習ができるように促せばいいのだと思うようになりました。

友人として教師として、私は日本で生活しながらも留学生から多くの刺激や情報をもたらっており、とてもラッキーだと思います。これらの経験は異文化に対する心の壁をより低くしてくれたり、よ

り良い対処法を教えてくださいました。どこにいても相手の国や環境、その人自身について理解しようとする努力し続けることが大切だなと改めて感じています。

(第三回へ続く)

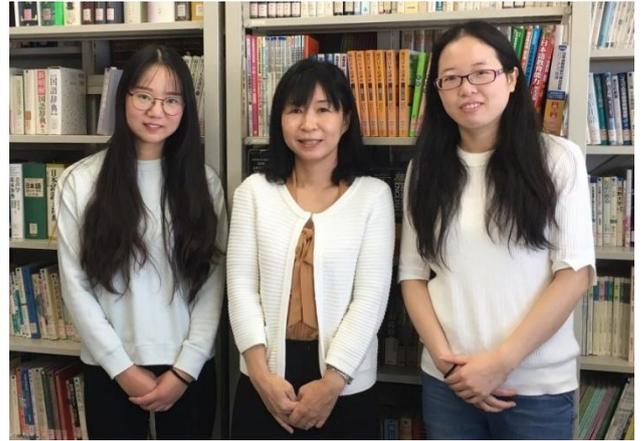


写真2 ゼミの留学生と一緒に